

対人援助学 & 心理学の縦横無尽

(3 3)

故水島新司を悼む

—あるいは想像力とシンボリックリソース

サトウタツヤ

(立命館大学総合心理学部)

この連中の真の敵は国会権力ではなく想像力の欠如だろうと僕は思った。

村上春樹『ノルウェイの森』

1 はじめに

漫画家、水島新司（敬称略）が2022年1月10日、亡くなった。享年82。新聞・テレビ・ネットでも様々に報道された。

彼は様々な野球マンガを発表してきたが、その代表作を1つ選ぶとなればやはり『ドカベン』だろうか。『あぶさん』『野球狂の詩』『球道くん』なども代表作であろう。

しかし今回ここで取り上げたいのは『男どアホウ甲子園』である。1970年から1975年まで『週刊少年サンデー』で連載された。1970年から1971年にテレビアニメが放送された。第19回（昭和48年度）小学館漫画賞受賞。ただし、この作品は原作・佐々木守、漫画・水島新司であるから、純粋な水島作品とは言えないかもしれない。ついでながら、原作の佐々木守にしてもその生涯を一瞥する限りでは、代表作の1つは『ウルトラマン』であり、『男どアホウ甲子園』は佐々木の代表作とは捉えられていない。

2 水島マンガの凄さは予見力？

水島新司の追悼番組（NHK）を見ていたら（日時も番組名も不明）、水島新司の凄さの1つに、将来を予見したということが上げられていた。五〇歳で活躍する投手、五打席敬遠される高校球児、女性野球選手、などなどである。もちろん、単なる予見ではなく、水島野球マンガを見た者たちに何らかのインスピレーションを与えたことが、実現に至った要因だったということは十分考えられる。トランザクション（相互相乗効果）である。

さて1970年代といえば、会社の定年は五五歳であった。中学校の卒業生が金の卵としてもてはやされた時期である。一五歳から働き始めて40年間勤め上げたら立派な爺さまである。そんなときの五〇歳のイメージと21世紀の今のイメージは全然違う。2015年に50歳代で登板したプロ野球投手は山本昌（本名：山本昌広）である。1965年生まれ。神奈川県茅ヶ崎市で育ち日大藤沢高等学校を卒業後、1984年に中日ドラゴンズに入団し2015年に引退。10月7日の広島戦に投手として出場し、50歳代で登板を実現した。

『野球狂の詩』の岩田鉄五郎は確かに未来を予見していたと言えるかもしれない。しかし、水島マンガの『男どアホウ甲子園』はもっとすごいのである。このマンガは1970年から1975年まで『週刊少年サンデー』で連載され、1970年から1971年にテレビアニメも放送されていた。

主人公の藤村 甲子園（ふじむら こうしえん）は、サウスポーの豪腕投手であり、いわゆるスポ根主人公そのものだが、その相棒の捕手・「豆タン」こと岩風 五郎（いわかぜ ごろう）は自動車事故で失明してしまう。盲目のキャッチャーとなった後は剛速球の音を聴いてボールを捕るのである。一塁手の丹波 左文字（たんば さもんじ）は暴力団一家の生まれで、右目・右腕を失っているが野球をやっている。言って良ければ身体障害者である。二塁手の結城 翼（ゆうき つばさ）は知力にあふれピアノも弾くという意味で野球選手らしくない。三塁手「美少女」こと千曲 ちあき（ちくま ちあき）は女性である。当時はマネージャーのベンチ入りさえ認められなかった時代である。遊撃手・神島 竜矢（かみしま りゅうや）は東海一帯を仕切っていた番長である。左翼手は時に「美少女」がついたがはっきりしない。中堅手・知覧 太郎（ちらん たろう）は右翼。右翼手は松葉 月夫（まつば つきお）で、名前の通り生まれつき足が不自由で、松葉杖姿でグラウンドに立ちプレーしている。そのほかに、投手・三塁手としてジャック 時田（ジャック ときた）がいる。アメリカ軍兵士を父に持つハーフである。



図 『男どアホウ甲子園』の登場人物（左から藤村・丹波・千曲・時田）

https://www.ne.jp/asahi/krk/kct/mz/mz_doaho.htm

つまり、その当時の高校野球において「普通」であった健康な男子は主人公の藤村甲子園の他、二塁手の二塁手の結城翼、遊撃手・神島竜矢、中堅手・知覧 太郎、投手・三塁手として大熊牛吉の5名であり、数の上で多数派だったわけではない。不良や番長等を

「不健康」であるとするなら、さらに主人公の「どアホウ」も普通じゃないなら、結城翼1名のみがノーマル男子野球部員だったにすぎない。

このようなインクルーシブなスポーツの樂園が、1970年代のスポ根マンガそれもスポ根の一目1番地の高校野球を描いたとしてマンガとして人気を博していたのだからたいしたものである。そして、もっとすごいことは、多くの読者はインクルーシブなマンガだというようなことには注意を払わず（そもそもインクルーシブなどという概念を当時の子どもたちが知るはずもない）、マンガを楽しんでいたということである。とはいえ、マンガは絵を用いているため、読者は片手片足だったり松葉杖をついていたり目が見えなかったりする高校生が活躍するマンガとして楽しんでいたことになる。

3 イマジネーションとシンボリックリソース

スイスの文化心理学者・タニアこと Tania Zittoun が重視する概念にイマジネーションがある。Imagination は一般的に想像（力）と訳されることが多いが、日本語の想像や妄想や空想とも意味が近くなってしまいうことに注意が必要である。西洋の哲学・心理学の用語としてのイマジネーション（Imagination）は、構想力と訳す方が適切な場合がある。

「“直接的設定(setting)”を抜け出して、過去や未来、現在において可能なことや不可能なことさえも探索することを可能にする経験を作り出すプロセス」がイマジネーションであるとタニアは定義している（Zittoun and Gillespie, 2016）。そして想像のループモデルを提案している。「イマジネーションというイベントは経験（から）の分離によって始まり、大抵の場合、（経験への）再結合という結末になる。つまりイマジネーションとはループである」（Zittoun and Gillespie, 2016; p40）

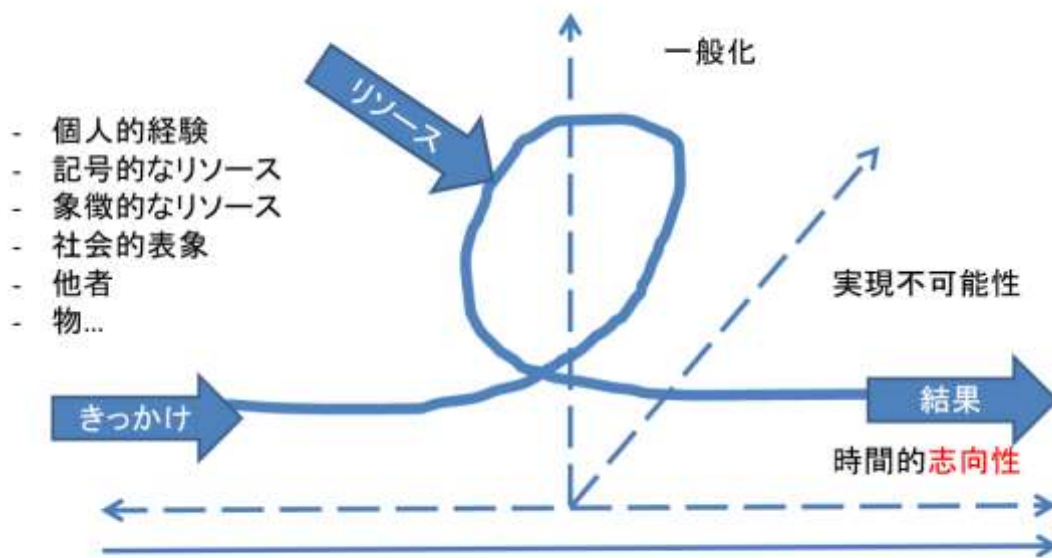


図 イマジネーション・ループ (Zittoun and Gillespie, 2016)

イメージーションはある時間に何かのきっかけで始まり、時間的志向性、一般化、実現不可能性の三次元上でループを描く。ここではイメージーション・ループの考え方自体に深入りすることは避けるが、あるきっかけで始まったイメージーションを促進したり抑制したりするリソース（資源）が存在することにタニアは注意を促している。リソースには様々なものがあるが、その中の1つにシンボリックリソース（Symbolic Resource／象徴という資源）がある。ここで資源とは石油やお金のようないわゆる物質的な資源のことを言っているわけではない。小説・映画・マンガのような素材がシンボリックリソースであり、イメージーション（想像）を促進したり抑制したりする1つの要因だということである。

そして、イメージーションが妄想や空想ではなく構想力に近い概念であることを思い出すならば、こうしたシンボリックリソースが個人の人生のあり方に影響を与えることは十分に考えられることであろう。「***という小説・映画・マンガに触れて***という仕事に興味を持ちました」ということは十分に考えられるし、このような明確な形をとらずとも人生のあり方や価値観に影響を与えていることも十分に考えられるだろう。

4 イ達直人現象

2010年12月のクリスマスの日。群馬県中央児童相談所の玄関前に10個のランドセルがプレゼントとして置かれていた。贈り主の名は伊達直人であった（この名前にピンと来る人と来ない人がいる）。このことが報道されると、全国で伊達直人の名前による寄附が相次いだ。同一人物が行ったのではなく、多くの人が同じ伊達直人の名を語って同時多発的にプレゼントを贈ったのである。世に「タイガーマスク運動」として知られることになった社会現象である。最初に伊達直人の名で寄附した人は、2016年になって実名を明かす（河村正剛氏）。彼は伊達直人の名を名乗る以前も匿名で寄附をしていたという。しかし、「世の中をなんとかしたい」という思いが募り、そんなときに「伊達直人」を名乗って社会に強いメッセージを送ることを思いついたのだというのである。

タイガーマスクは日本のプロレスラーとして活躍した実在の覆面レスラーだが、そのアイディアの源は雑誌マンガの『タイガーマスク』にある。原作：梶原一騎・作画：辻なおきによって1968年から1971年にかけて週刊雑誌に連載されていたマンガである。孤児院「ちびっこハウス」の主人公・伊達直人は出奔して悪役レスラー養成機関「虎の穴」で訓練されてタイガーマスクとしてデビューする。本来はファイトマネーの一部を虎の穴に収めるべきであったが、ちびっこハウスのために寄附したことから虎の穴が送り出す刺客レスラーと次々に闘うことになる、という物語である。

河村さんは雑誌マンガのタイガーマスクではなくプロレス界に一大ブームを巻き起こした「初代タイガーマスク」に影響を受けていてその名を借りたのだが、伊達直人の名は、雑誌マンガの『タイガーマスク』の主人公・伊達直人に親しんでいた河村さんよりも少し年長

の年齢層の感情をも大きく揺さぶり、全国各地に伊達直人が現れ、「タイガーマスク運動」と呼ばれるようになったのである。このマンガを読んだ当時の小中学生は、伊達直人の名をフェアプレーでレスラーと戦い孤児を助けるために寄附するヒーローとして取り込んでおり（すり込まれており）、だからこそ、伊達直人の名で寄附が行われたニュースが流れると、多くの人が伊達直人を名乗って寄附を行ったのだと思われる。寄附行為に及ばなかったとしても、「伊達直人と寄附」という物語に目頭を熱くしたのである。

アラ還（1960年代生まれ or 昭和30年代生まれ）やそれ以上の年齢のおじさん達は、今からみれば男女同権意識も低くその他いろいろ今から見れば劣った考え方を持っていることは否めない。社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）とか積極的格差是正措置（アフーマティブアクション）などとは縁遠い子ども時代であった。しかし、そうであったとしても子ども時代に触れていたマンガ『男どアホウ甲子園』『タイガーマスク』がシンボリックリソースとして機能している。時代を先読みするような物語がシンボリックリソースとして機能するからこそ、その当時の価値観（簡単にいうとマイノリティを認めないとか男尊女卑とかの価値観）を離れてイメージーションを働かせることができているのかもしれない。

水島新司さんの死を悼みつつ合掌。

付記

前橋市は2017年から、ふるさと納税の寄付金を活用してタイガーマスク運動支援プロジェクトを開始したとのことである。

前橋市長・山本りゅうのブログに「タイガーマスク運動ふるさと納税」という記事がある。
<https://ameblo.jp/ryu-yamamoto/entry-12646890713.html>

以下のような記事もあった。

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_zeisei/czaisei/czaisei_seido/furusato/case_study/pdf/33.pdf

ただし、前橋市で2022年も継続されているかどうかは不明である。2022年にふるさと納税でタイガーマスクを活用しているのは、佐賀県鹿島市と高知県日高村であるようだ。

また群馬テレビでは2022年1月に【新春特集・今年にかける】タイガーマスク運動 2度目の寅年 河村正剛さん＝前橋市（22/01/06）を放映し、それはYouTubeで視聴可能である。

https://www.youtube.com/watch?v=RWi_DkiI8Yg

さらに、タイガーマスク運動を一過性のものとして終わらせないためのタイガーマスク基金というものがある。タイガーマスク基金は、「児童養護施設などの退所者や社会的養護が必要な子ども・若者に、生活自立、学業、就労、家族形成、社会参画などの支援を総合的に行い、社会で活躍する人材を育成するとともに、広く一般にこの問題を提起し、児童養護

施設や自立援助ホームなどが抱える課題、係る法律・政策の改善、ひいては児童虐待予防の啓発事業などを展開し、この問題の根本解決を図ることを目的とする NPO」だとのことである。

<http://www.tigermask-fund.jp/what.html>

引用記事

タイガーマスク“伊達直人”が本名で語る意義 正体を明かした社員が見つめる過去と今後 東洋経済オンライン 2018/04/18 6:00 (2022/02/25 確認)

<https://toyokeizai.net/articles/-/216524>